

「観客と登場人物の視点の同一化：ヒッチコック映画におけるサスペンス効果について」

尾崎 美緒

アルフレッド・ヒッチコックは20世紀を代表するサスペンス映画監督である。彼の死後、四半世紀以上が過ぎた現在においても、“サスペンスの神様”と称され、彼の映画は古びることがない。代表的な作品には、「裏窓」や、「めまい」、「北北西へ進路を取れ」、「サイコ」などがあげられる。

一体、ヒッチコック映画の、どのような要素が、半世紀以上にわたって観客を惹きつけ続けるのだろうか。彼の撮る映画の物語構成自体は、特別なものではない。観客を物語へ巻き込み、登場人物と共にサスペンスを体験させるテクニックこそが、彼の映画を撮る技術での特筆すべき点である。では、ヒッチコックは、どのように観客の視点を物語へと取り込むことに成功したのだろうか。

本論文では、ヒッチコックの比較的初期の作品であり、イギリスからアメリカへと移った時期に撮られた「バルカン超特急」、「レベッカ」、「断崖」の3作品において、サスペンス体験を通して、観客の視点が主人公と同一化していく過程を分析したい。不安感や、恐怖感、スリルなどのサスペンスを構成する心理的な要素がいかにか、観客と登場人物の視点の同一化に利用されているのだろうか。観客は、様々なイベントを主人公を通して体験することにより、不安感や恐怖感など主人公が味わう感情を共に体験することとなる。この体験を通して、観客自身が、主人公に共感を抱くこととなる。物語が進行すると共に、主人公と観客の視点は、より近づき、さらには同一化していくのではないだろうか。

映画研究において大きな影響を与えたLaura Mulveyによる“Visual Pleasure and Narrative Cinema”において論じられているように、映画は、男性主体の視点で撮られ、女性は、単なる視点の対象としてアイコンであり、受動的な存在である、という理論は、ヒッチコックの映画においても真なのだろうか。また、Robert J. Corberは、*In the Name of National Security: Hitchcock, Homophobia, and the Political Construction of Gender in Postwar America*の中で、エディプスコンプレックスは、現代社会においても克服されておらず、映画にも反映されているという。どのような部分において、ヒッチコック映画にもエディプスコンプレックスの影響が見られるのだろうか。

本論文で取り扱う3作品では、女性主人公の抱く疑いの念がサスペンスの根源である。どの作品においても、女性主人公は、男性キャラクターの言動を不審に思い、疑念を抱き、不信感を募らせ、なかなか確証を得ることができない。同時に、観客も女性主人公の視点を通して、男性キャラクターの言動を観察する。この観察の過程で、男性キャラクターに対する疑念は大きく膨らむが、確証がつかめない。観客は、女性主人公と共に葛藤や不信感を味わうと同時に、女性主人公に共感や親近感を覚え、視点が同一化していく。また、女性主人公と観客が抱く男性キャ

ラクターに対する疑念が、本当なのか、それともただの思い込みなのかが確定しないことにより、不安感を煽り、サスペンスの増大を助長させている。

「バルカン超特急」では、物語が発展するにつれ、どのようにサスペンスが増大していくのか、また、女性主人公がいかに関わっているのかを考察する。「レベッカ」では、映画には登場することがなく、実体のないレベッカがどのようにして“存在”し、サスペンスをつくり出しているのか、また第二デ・ウィンター夫人のデンバース夫人との関係性や、夫であるマキシムに対する不信の葛藤を分析することにより、視聴者とヒロインの視点の同一化についても言及する。「断崖」では、男性キャラクターのつく嘘や、不審な言動が、いかに女性主人公や観客を“思い込み”に追いやるのかを分析する。

最終章は、結論としているが、今後の展望についても言及する。女性主人公の映画では、頼りない男性キャラクターに抱く疑念により、女性主人公は葛藤を味わうこととなる。この女性主人公の体験が、観客との視点の同一化に大きな役割を担っており、さらには、サスペンスの生成に大きな役割を担っていることが分かった。ヒッチコックの「裏窓」、「めまい」、「北北西へ進路を取れ」、「サイコ」などの男性主人公の映画における女性キャラクターのポジションについては、今後の研究の課題である。